るぞたうとけれ、

〔用捨箱上〕鍋取杓子之古製

鍋取公家といふは、いやしめていふにはあらず、老懸をかけたるをいへるなり、老懸を俗に鍋取又釜取ともいふ、さて今厨にて鍋取をもちふる家、たま〳〵はあれども、革鞋足半の形に作れり、○中略此畫○百鬼夜行畫の杓子の柄いたく曲れり、案るに昔はみなかくの如くなりし故に、杓子定規の諺はあるなるべし、此古製百餘年前までは、江州多賀社より守りに出す杓子のみに、殘りありしとをぼしく、尤の草紙原板寛永十一年刻まがれる物の品々の段、大工のかれや藏のかぎ、檜物屋の仕事、なべのつる、おたがしやく、と並べ出せり、又俳諧にも、

玉海集眞室撰明暦二年印本

ゆがみなりにも壽命ながかれ

手づよさはお多賀杓子の荒けづり

など見えたり、蝌蚪をおたが杓子といふも、お玉じやくしといふは誤水中にて尾のうね〳〵とうごめくさま、柄の曲りたる杓子に似たる故の名なる事必せり、今のお多賀杓子は、常の杓子にかはらねば蝌蚪にも似ず、柄は定規ともなるべく、眞直にて古製を失ひたり、

〔茶道筌蹄五〕杓子

黑塗は黑の食次に用ひ、朱は朱の食次に用ゆ、黑の手付には形長きを用ゆ、金は朱の手付食次に添ふ、尤火色なり、

〔精進魚類物語〕かゝる所に、杓子の荒太郎、本より山そだちの男にて、心も甲にはやり物なりけるが、たゞ一人かけ入て、ひたとくむで御器の中へどうとおとす、○下略

〔玉露叢十三〕一同年○寛永十六年ニ江戸大火、此時御城回祿ス、御城御普請出來シテ、御移徙ノ時、御一門